



1 伝統の嶺岡競歩～その今昔物語～

本日（5月28日）、小瀧学年（1年生）は嶺岡競歩に出かけています。職員室の皆さんが「職員室だより」を読んでもらっている頃、開会式を終えた生徒たちは遙か先のゴールを目指して歩き始めていると思います（校長も暇人も「やんでいます（標準語だと→）歩いています」）。


過日、17号に記しましたように、40年近く前の本大会を記録したドキュメンタリーがあります。その中で、当時の校長、福原修先生は次のように述べておられます。

最近の学校は、学校独特の行事が減ってきましたけれど、安房高にこのような嶺岡競歩大会という特殊な行事があることを非常に誇りにしております。

この行事は、一つはグループで行動することで友情を改めて確認することと、もう一つは、我々安房高をとりまく房州の美しい自然を生徒が味わうことで、とかく忘れがちな、身近で美しいものを再発見して、明日からの自分の生活に活かしていくという大きな意義をこめております。

今まで長く続けてきて大きな成果があった行事であると思っています。



※当時の開会式の様子です。実は私もこの末端に連なっていました…

★「嶺岡競歩大会」は半世紀近く続く安房高の伝統行事です。「競歩」ではありませんが、一人ひとりの速度を競うものではありません。設定タイムに合わせてグループ全員（男女混合）で知恵と力を出し合う協同学習として続けてきたものです。…それは、正に「雁の飛行」なのですね。

そんな伝統行事に、庄司校長が、当代としての思いを語っている頃です。それは次号で…



2 授業公開にお邪魔しました～さまざまな学校、さまざまな学び～

それぞれの学校にそれぞれの学びがあり、授業を参観させていただくたびに発見や驚きがあります。昨年度拝見した安房拓心高校の調理実習では、教師と生徒の強固な信頼関係を基盤とした緊張感溢れる授業に息をのみました。定時制高校には、年齢・経歴さまざまな生徒が机を並べています。日本語を母語としない生徒が在籍している学校も少なくありません。特別支援学校での清掃の時間は、それ自体が優れた教育活動として行われています。ドキュメンタリー映画「みんなの学校」で紹介されている大空小学校には、特別支援学級がなくみんな同じ教室で学び合っています。

「良い学校」「力のある学校」とは、いわゆる偏差値の上下や進路実績のみを言うのではなく、一人ひとりの生徒に向き合い、その成長を支え続ける学校だと思います。

伝統は、大切にすることが決して甘えず、貯金は、積み重ねるが決して切り崩さず…私たちも「良き学校」であり続けたいですね。

3 大学入試を考える①～「ロボットは東大に入れるか」～

歳をとると無駄に朝が早くなります



休日など、寝床で目覚めても起き出して何やら始めると家族に迷惑なので、仕方なくそーっとテレビをつけたりします。

日曜の早朝、桂文珍さんの対談番組に、**国立情報科学研究所**の**新井紀子**さんが出ていました。

新井さんを最初に知ったのは、作家の重松清さんが絶賛した『**数学は言葉**』というその著作からでした。

「イプシロン-デルタ論法、集合・位相、線形空間…この3つで8割が脱落する」…大学で数学を教授する中での格闘から、新井さんはやがて「**言語教育の方法論で数学を教える**」という指導法に辿り着きます。…もちろん、「超文系」の私には、専門領域での話は分からないところもありますが、氏が自身一流の研究者であるなかで、「『論理力がない人はだめなんだよね』とか『最近の学生は論理力がどんどん落ちていて、イプシロン-デルタなんて、教えようがない』と嘆いているだけでは、数学の教員として怠慢だと言われても仕方がない…」と奮闘する姿には「スゴイ！」との感嘆を禁じ得ません。



さて、その新井さん…現在は国立情報科学研究所に籍を置き、人工知能プロジェクト「**ロボットは東大に入れるか**」プロジェクトディレクターを務めています。

2021年度の東大入試突破を目標に始められたプロジェクトがいかなるものか、近未来の人工知能と人間の在り方、また「学力」とは何かということやその測定方法としての検査（入試）の在り方などを考えさせてくれます。

…さて人工知能が突破してしまいそうな入試科目は何でしょうか？（英語？地理？物理？数学？）

暇人の独り言

大学の考査では、ノート等の持ち込みが許可されていたものが多くありました。

でも、大学での学びの資格を得ようとする選抜（入試）では、ノートの持ち込みがOKとなった大学は知りません。

電子辞書などの記憶媒体やネットにアクセスできる機器（スマホ等）の持ち込みがOKになる時がいずれは来る！？…んなわけないか？

4 大学入試を考える②～新制度についてⅡ～

現在の大学入試センター試験に代わり導入される「新テスト」は、これからの大学教育を受けるために必要な能力について把握することを目的としています。

すでに言われているように、「知識・技能」に加え、「**思考力・判断力・表現力**」がより重視されることになり、従来の「教科型」だけでなく、「**合教科・科目型**」「**総合型**」が導入される予定です。

また、試験は年複数回の実施が予定され、解答方法も、選択式のほかに**記述式**を加えることとし、「一点刻み」であった成績表示も、**段階別表示**に変更される見通しです。

CBT方式での実施が前提となる見込みで、それを前提とした問題や実施回数の検討がされるということです。

また、各大学には「**アドミッション・ポリシー（入学者受入の方針）**」を明示することが求められ、志願者に「どのような能力を求めるのか」を明らかにすることとされています。

その「方針」にそって、各大学では上記「新テスト」のほか、個別検査として、**小論文や面接、集団討論などのほか、高校時代の活動報告書**などが選抜の方法として活用されることになると言われています。

前号まで述べてきた、高校と大学の接続（準備教育と完成教育の融合）が図られようとしているのだと思います。

★CBT (Computer Based Testing) 方式とは、コンピュータを利用して実施する試験方式のことです。

受験者はコンピュータに表示された試験問題に対して、マウスやキーボードを用いて解答します。